

第26回 庭野平和賞贈呈理由

庭野平和賞委員会は、ギデオン・バグマ・ビヤムギシャ参事司祭に、彼のHIV/エイズと共に生きる人々の尊厳と人権擁護に対する貢献を高く評価し、第26回庭野平和賞を贈ることを決定しました。

1959年にウガンダで生まれた聖公会牧師、ギデオン・ビヤムギシャ参事司祭は、1991年、自分がHIV陽性者であることを知らされました。彼は、自らの個人的な苦しみを、人びとに勇気と希望を与える霊的、社会的メッセージに転換することを決意しました。彼は、自分自身がHIV陽性者であることを公表した最初のアフリカ人聖職者であり、感染を恥辱と考え沈黙することがHIV対策の最大の障壁のひとつとされるなか、その大きな障壁を自ら取り除いたのです。現在、彼はウガンダとザンビアにある二つの聖堂の司祭を務めるかたわら、とりわけ子供に焦点をあてながら、多くの場所で不正義と闘う活動を続けています。

HIV/エイズの世界的流行は、この病気と共に生きる3千3百万人の人々をはじめ、その家族や地域社会、国にはかりしれない苦しみをもたらしています。それは、現代の人々にとって、人道上、最大の課題のひとつになっています。とくにこの病気による被害が甚大な国では、HIV/エイズに対して勇気をもって取り組まないかぎり、平和は望めません。そのため、HIV/エイズの世界的流行が、多くの国の政治的経済的な課題のなかで、人道、開発、人権、安全保障上の問題として重要な位置を占めているのです。エイズ問題は国連の安全保障理事会や数回にわたる特別総会のなかで討議されてきました。そして、HIV/エイズの流行がもたらす影響の克服に向けた地球規模の取り組みを主導するため、国連の多部署からなる特別組織として国連エイズ合同計画（UNAIDS）が新設されました。世界エイズ・結核・マラリア対策基金、世界銀行、およびユニセフは、その資金の多くをHIV/エイズ対策に充てています。HIV/エイズの撲滅は、世界中が認めたミレニアム開発目標のひとつであり、G8による会議での重要課題でもあるのです。

いま緊急に必要とされるのは、官と民、世界と地域をつなぐクリエイティブな連携であり、倫理的指針を強く持ちながらこの複雑な病気に勇敢に立ち向かっていくリーダーシップであり、さらには流行を阻止するとともに、HIV/エイズに苦しむ人々を尊敬と思いやりの心で治療する決意です。HIV/エイズをめぐる問題の一角には、（彼らに烙印を押しした）宗教指導者の存在があります。その意味で、問題解決の中心ともなりうる宗教指導者にとって、HIV/エイズ撲滅への努力を支持し、リーダーシップを発揮していくことは必要不可欠なことなのです。

ギデオン参事司祭こそ、そのようなリーダーシップを発揮できる指導者であります。彼は自分の個人的な体験や倫理を話題にしながら、さらにはユーモアをまじえて要点を伝え、

決して怖れることなくデリケートな問題を論じます。宗教界には長年にわたりHIV/エイズについての徹底した沈黙と誤解が浸透してきました。それを打ち破ることによって、この病気の恐怖にとらわれていた人々にとって、彼は世界中に希望を取り次ぐ存在となったのです。

庭野平和賞委員会は、この壊滅的な苦悩に立ち向かう司祭の比類のない献身と勇気に深い感銘を受けました。彼は、自国ウガンダの宗教界や文化人を対象に、さらにはアフリカ大陸全土、そして世界に向けて、HIV/エイズに関する人びとの意識向上に貢献してきました。彼はHIV/エイズに対する認識を変革した、力強い行動の人です。そしてつねに智慧と思いやりの心で行動し、異なる文化をもつ人々と、年齢を超えてコミュニケーションのできる偉大な才能を発揮してきました。

ギデオン参事司祭は発言力と行動力を兼ね備えた人物であります。その忍耐強さとリーダーシップは、HIV/エイズに関する知識の普及やケア、予防戦略の開発に向けて他の宗教指導者や宗教界を動かしてきました。そうした戦略の一つに、HIV/エイズに関連した汚名や拒絶、また無関心や差別と闘うネットワークの構築があります。HIV/エイズ教育において、彼の支持を背景に宗教指導者や宗教組織による前向きな意見が増えてきている事実をここに特記したいと思います。

アフリカ人の約85%は何らかの宗教組織に属しており、そのため礼拝の場所はHIV/エイズ教育にとって絶好の場所となっています。宗教組織が持つ社会基盤は、一般のNGOや保健関連組織、政府や国連関係の支援システムなどよりもはるかに規模が大きく、ギデオン司祭はそうした宗教組織が持つ可能性を認識して活用してきました。

HIV/エイズの本質とこの病気に苦しむ人々の権利や責任について、常に忌憚のない意見を述べるギデオン参事司祭のすがたは、知性と行動力を備えた聖職者として世の中に対する良き手本となっています。その活動は世界中に大きな影響を与え、彼の声はHIV/エイズの流行に曝されているあらゆる地域に届き、尊重されています。科学者や専門家による組織や国連が主催するHIV/エイズ会議の場で、また地域や教会において、彼は幅広い講演活動を続けています。彼の言葉は、人々に感動を与え、心に変化をもたらします。彼自身、数百人の地域の子供たちの面倒を見ていますが、その行動はHIV/エイズによって親を失い孤児となった数百万人に子供たちにとって新たな希望となっています。

彼が主導した数多くの活動とその成果のなかで、2002年の”HIV/エイズと共に生きる、或いは自らも罹患者である宗教指導者のアフリカネットワーク”(ANERELA)の創設は特筆に値します。この組織は、2008年には世界中に広がり、現在2500人の指導者が所属しています。

ギデオン参事司祭は、”変化をもたらすリーダーシップと開発のための希望学園”を創設し、その指導にあたっています。彼は、ウガンダ・エイズ委員会、ワールド・ビジョン・

インターナショナル、エキュメニカル・アドボカシー・アライアンス（EAA）で活躍し、現在はHIV/エイズ問題に関するクリスチャンエイズ親善大使の要職にあります。また、聖職者、NGO、官と民、政策立案者、保健の専門家の間の協働を促すアフリカHIV対策シンクタンクの理事も務めています。

以上のような人類に対する傑出した貢献に対し、第26回庭野平和賞をギデオンのギデオン・ビヤムギン参事司祭に贈呈いたします。

庭野平和賞委員会委員長
グナール・スタルセット博士